

令和6年度 嶺北特別支援学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
1 学校業務改善のための取組 DX委員会 (情報管理部)	連絡アプリを使った遅刻、欠席連絡やお便り等の配信、Webフォームを利用したアンケート調査、オンライン会議ツールを活用した研修やオンラインミーティングなど、学校全体としてICT機器を活用した業務改善を図る。	学校全体としてICT機器を活用した業務改善を進めることができたが、業務削減や在校時間の縮減にまで至っていない教職員もいた。遅刻、欠席連絡は問題なく運用できているが、お便り等の配信は一部に留まっている。Webフォームを利用した保護者向けアンケート調査は、まだ慣れていない教職員、保護者がおり、効率的に行えない箇所もあったため、継続して取り組んでいけるとよい。	連絡アプリを使った遅刻、欠席連絡は継続して取り組んでいく。次年度は、学校全体でペーパーレスを推進し、お便り等のデータ配信を進めていきたい。校務支援システムを活用し、出席簿や保健関係書類、児童生徒情報など業務改善につなげていく。年度当初に提出された書類の入力作業については、Webフォームを利用したアンケート調査を活用することで業務削減につなげていきたい。
2 人権教育の推進 (図書研究部)	児童生徒の障がい特性を理解し、自己や他者を大切にする指導を行う。	取組目標、成果目標ともに、A+Bの合計が90%以上となり、目標を達成することができた。しかし、Aだけで見ると、取組目標は48.6%、成果目標は34.7%という結果となり、取組は行ったが成果が十分に得られなかったと感じた教職員が多かったといえる。自己肯定感を高めたり、相手を認める力を育むことは、すぐに成果が出るものではないと思うので、今後も継続して取り組んでいけると良い。	今年度は、重点目標の2つ目についての具体的取組を行ったので、次年度は、1つ目の人権意識を高めるに焦点を当てて、取組を行っていきたい。次年度の人権研修では、人権感覚チェックシートを使用して、日ごろの児童生徒へのかかわりを振り返る機会を設定する予定である。そのことも踏まえて、具体的取組、目標を設定し、教職員全員が、人権を意識した対応ができるように取り組んでいきたい。
3 教育課程 学習支援 (小学部 低学年)	自ら行動したり、自己表現したりする態度を養うために、安心できる環境設定や関わりに努め、教員間で動画記録などを振り返りながら個の発達段階やニーズに応じた適切な支援について検討する。	昨年度と同様に、学部研究で遊びの指導の動画を撮り、振り返りを行った。対象児のねらいを元に友達と関わる場面を取り上げて授業改善を行った。教師間で話し合われたことを取り入れて授業を行ったことで児童の成長が見られ、保護者からも高い評価(97.3%)を得られた。今後は、授業だけでなく日常生活の中でも支援の在り方を検討していきたい。	引き続き、動画を撮って振り返りを行うことで支援の改善に取り組む。また、学部内で児童への理解や発達段階に応じた支援について共通理解が持てるように、児童に対して共通のアセスメントを実施したり、クラスや低学年全体で定期的に話し合う時間を設けたりして、支援の充実を図っていく。
4 教育課程 学習支援 (小学部 高学年)	児童が体力を向上していけるように、年間を通して学年やクラス活動にランニングや体操、筋力トレーニングなどを取り入れる。体育の時間やおはようタイムなどの全体場で発表の時間を設け、児童の頑張る場面を共有し賞賛することで、児童の意欲を高める。	昨年度から大きく目標を変え「体力作り」に取り組んだ。年間を通して、クラス活動などに体力作りに関することを意識して取り入れ、学部全体場で発表する機会を設けて賞賛した。その様子を通信等で発信したことで保護者からは高い評価(満足度100%)を得た。しかし、児童の自発的に体を動かそうとする場面が十分には増えていない。	児童の自発的に体を動かそうとする場面が増えるように、個に応じた指導の工夫が必要と考える。実態によっては、個別に体を使った活動を取り入れて指導する。おはようタイムや体育など学部全体場で児童の頑張る場面を共有し賞賛することを継続しながら、児童の意欲を高められるようにする。
5 教育課程 学習支援 (中学部)	教員間で話し合いを行い、生徒一人一人に対する適切な指導・支援を共有、実践する。様々な集団活動の中で、生徒が自ら思いを伝えたり、相手の考えを受け入れたりできる場面や協力し合う活動内容を設定し、心身の成長を育む。	教職員の取組指標、成果指標ともに、A+Bの合計が100%となり、目標を十分に達成することができた。しかし、Aの達成度は取組指標、成果指標ともに30%にとどまっている。保護者の満足度指標に関しては、日常生活面では約57%、社会生活面で約70%の保護者が子どもの成長を感じている一方、学習面では50%を、身体面では40%をきる結果となった。	具体的取組の前半に関しては、Aの達成度がもっと上がるように今後も話し合いの機会を持ち、また話し合いの質を高めていく。後半に関しては、保護者の満足度の高かった社会生活面の更なる充実を目指し、生徒がやり取りを通して協力しながら学び合う活動場面を設定して心身の成長を図りたい。
6 教育課程 学習支援 (高等部)	卒業後の生活を見据え、社会参加への関心と意欲を高めるために、現場実習を柱として、地域と連携し、個々の力を伸ばす学習活動(校外での体験・協働、外部講師の招聘等)を推進する。	積極的に校外で活動できる機会や地域の方と交流する機会を増やし、出前講座や外部講師を招聘しての授業も行ってきた。現場実習を中心に様々な学習活動におけるアセスメントを大切に、個々の活動設定や支援を丁寧に進めたことで、保護者は基本的な生活習慣面、コミュニケーション面、作業スキル面、意欲・態度面、それぞれでの成長を感じていた。	現場実習を柱として、外部講師の意見など、第三者からの客観的な評価を大切に、PDCAサイクルを進め、生徒により良い学習内容を提供していく。実態や適性の把握を丁寧に進め、生徒と保護者とのコミュニケーションを大事にしていきたい。生徒が社会を知り、触れ合える機会を多く企画し、関心や意欲の向上につなげたい。
7 自立支援 (舎務部)	保護者や学校との連携を密にし、寄宿舎生一人一人の実態や目標、支援方法を共有する。また、寄宿舎生が生活の中で、成功体験を積み重ねることができる場面を設定し、自立につなげる。	保護者、担任との連携を強め、個に応じた目標や支援方法を共有したこと、また寄宿舎生活において成功体験を積み重ねるよう働きかけを実践したことで、自立に向けた成長に確かな成果が得られ、保護者からも高い評価を得られた。(満足度97.4%)	寄宿舎生一人一人の実態に応じた理解と支援について、保護者、担任と強く連携することが支援の鍵であるが、中には、子どもの成長に実感をもちにくい保護者もある。今後も保護者との連携を強く意識し、成功体験が得られる効果的な働きかけや支援を工夫する。また、子どもの成長の様子を保護者に具体的に伝える工夫をし、機会を増やすよう努めたい。
8 健康・安全 (保健部)	防災や応急処置の訓練や研修に取り組み、児童生徒の安全確保に関する意識を高める。	防護安全係や救助救出係の役割である防火安全扉の開閉や担架の使用法の研修を行った。避難訓練時には、消火器体験、防災の話やグッズ紹介、保護者へ安否確認メールを行うなど、防災への意識を高めることができ、保護者からも高い評価(96.2%)を得られた。	次年度も、年に3回様々な災害を想定し、防災意識を高められる内容の訓練を実施したい。通信を発行する等保護者と情報共有をしていけるとよい。また、災害だけでなく、熱中症や感染症の予防における適切な保健支援や環境の整備などを行い、リスクを回避しながら児童生徒の安全に努めていきたい。
9 生徒支援 (指導部) (地域支援部)	各学部体育大会や文化祭などの学校行事において、児童生徒が活躍できるよう工夫する。	体育大会は、昨年度に引き続き、平日に学部ごとに開催した。各学部の実態に応じた活動内容を設定したり学部間交流を行ったりした。文化祭では、今年度からPTA販売がなくなったものの大きな混乱は見られなかった。教職員が児童生徒の実態に合わせた取り組みや支援を行ったことで、保護者から高い評価(満足度99.0%)を得られた。	体育大会では、練習から本番まで猛暑が続いた。今後もそのような状況が想定されるため、熱中症対策も含め、実施時期や実施方法について検討していく。文化祭では、児童生徒数の増加に伴い、駐車場や活動場所の確保が厳しい状況にある。引き続き、児童生徒が活動しやすい環境づくりとスムーズな運営ができるよう努めていきたい。
	校内の各種委員会や各学部の支援会議などに参加し、児童生徒の状況を把握し課題について共有する。必要に応じてSC(スクールカウンセラー)やSSW(スクールソーシャルワーカー)の活用方法や福祉情報を提供することで、よりよい支援につなげる。	地域支援部通信などを通して、SCやSSWについて定期的に発信をしたことで、保護者からは目標指数以上の評価を得ることができた。一方で、教職員は情報を得たり発信したりすることができなかったとの回答が多く、目標指数を達成することができなかった。情報の発信の仕方や啓発活動に工夫が必要である。	地域支援情報通信による発信を継続していくと共に、SCやSSWを必要に応じて活用できるよう啓発活動を強化していく。またSC学習会や特コ学習会など研修の持ち方や内容を見直すことで、情報を発信する機会を増やしたり、会議での定期周知や紙媒体での掲示など、福祉に関する情報の共有の仕方を工夫したりする。
10 進路支援 (進路指導部)	関係機関との連携を通して収集した進路情報を教職員間で共有し、進路説明会や懇談時などに積極的に保護者に提供する。	教職員に対しては、どの学部においても、進路に関する情報提供や共有がおおむね行っていたことが伺える。保護者に対しては、特に小、中学部において、将来の進路に必要な情報を得られ、理解が深まった、という実感が不十分だったようだ。それぞれの学部のニーズを把握し、次の学年や学部そして学校卒業後へと近い将来の生活から進路についてのイメージを持てるような情報提供や取組を工夫する必要がある。	年5回の進路通信の内容を見直し、充実させる。日常的な支援が卒業後の進路に繋がっていること、各学部で今からできることなど、進路指導部として保護者や教職員に伝えたい内容を付け加える。また、各学部の保護者や教職員が必要としている情報をアンケート等で把握し、それに応じて進路通信で情報提供を行ったり、研修会の内容に反映させたりする。進路説明会などで積極的に外部講師を招く。
11 保護者との連携 (渉外部)	学校行事やPTA行事などで保護者の参加する機会を増やし、PTA活動の充実を図る。	保護者・教職員ともに学校行事やPTA行事に参加しやすいように日程や内容を工夫したとの評価であった。特に親子レクリエーションやPTA研修会では、PTA委員(研修委員)から、保護者のコネクションからの提案や現在保護者が悩んでいたり、求めているりする内容を取り入れ、充実した時間を共有できた。	これまで以上に教員主導のPTA行事から保護者の意見を取り入れながら企画・運営をする。また、保護者がPTA活動に積極的に参加できるようにより一層の工夫が求められる。保護者のアンケートや意見を収集する方法も工夫しながら、保護者と教職員が子どものために何ができるかを試行錯誤しながら進めることが求められる。